

日本で最後の生存記録となった ニホンカワウソ個体に関する目撃情報の整理

吉川 琴子¹, 谷地森秀二², 加藤 元海^{1,3}

¹ 高知大学理学部理学生物科学コース理論生物学研究室

² 四国自然史科学研究センター

³ 高知大学大学院黒潮圏科学部門

摘 要

ニホンカワウソは1979年に高知県須崎市の新荘川で目撃された個体を最後に、現在では絶滅種とされている。これまでの報告では、目撃日時や場所に関する情報の蓄積が乏しかったため、1979年に目撃されたニホンカワウソに関する行動範囲や個体数などの詳細はわかっていない。本研究では、須崎市教育委員会生涯学習課に保管されていたニホンカワウソの資料を電子化して保存するとともに、可能な限り目撃情報の日時と場所を特定し情報を整理した。新荘川周辺で時間や場所を特定できた目撃情報は276件あり、そのうち1979年の情報が111件であった。1979年は、短期間に首に身体的な特徴をもった個体とまたない個体が局所的に同時に見られた。加えて、同時期に人慣れしている個体としていない個体が局所的に見られたことから、この時期に目撃されたニホンカワウソは行動的にも特徴が異なっていた。1974年にはメスの個体、1975年にはオスの個体が新荘川周辺で生存していたことがわかっている。ニホンカワウソの寿命は10-15年と推定されていることから、1979年の新荘川周辺には複数個体生存していた可能性が示唆される。

は じ め に

ニホンカワウソ (*Lutra lutra nippon*) は、以前は日本に広く生息していたカワウソ属の一種である。太く長い尾や水かきがある手足をもち、毛は密で撥水性をもつことにより断熱の効果を備えていた (安藤 2008)。平安時代から漢方薬として肝臓が利用され、明治以降になってもその需要が続いたことに加え、明治初期から昭和初期にかけて防寒のための毛皮の軍需が高まった

ことにより、ニホンカワウソが大量に乱獲された (安藤 2008)。1928年に捕獲禁止獣に指定されたが (町田 1998)、その後も密猟が続いたために個体数が激減した (安藤 2008)。1950年以降の高度経済成長に伴って、農業のための取水や河川改修によって餌となる河川の魚類が減少したことや、海岸沿いに道路が建設されるなどして海岸と河川を往来するニホンカワウソの行動が阻まれたことが、四国においてニホンカワウソの個体数が減少した一因と考えられている (佐藤・加藤 2013; 佐藤ほか 2017)。環境省が認定しているニホンカワウソの最後の生存記録は1979年であり (URL: <http://www.env.go.jp/press/files/jp/20549.pdf>; 2017年9月4日確認)、2012年8月の環境省レッドリスト改訂において絶滅種に選定された (URL: <http://www.env.go.jp/press/press.php?serial=15619>; 2016年12月20日確認)。ただし、琉球大学が長崎県対馬で2017年2月にカワウソの動画を撮影したことを発表しており、環境省はニホンカワウソの可能性を含めて調査中である (URL: http://www.u-ryukyu.ac.jp/univ_info/announcement/press2017081701/; 2017年9月4日確認)。

日本で最後の生存記録となったニホンカワウソ個体が現れたのは、高知県須崎市の新荘川周辺である。1974年の7月と8月に新荘川周辺に現れた個体の写真、1975年9月5日に須崎市押岡大阪セメント高知工場に現れた個体の写真・映像、1979年の3月から10月にかけて新荘川周辺に現れた個体の写真・映像がそれぞれ撮影された (宮本 2015)。特に、1979年の個体に関しては、首にヒモが巻き付いていたことや遊泳中の子どもに接近するなど、撮影された写真には目を引く特徴が残されていた。新荘川周辺で目撃されたニホンカワウソに関する資料は、須崎市教育委員会生涯学習課にまとめて保管されてきたが、閲覧には申請して許可を受ける必要があるため、

これまでほとんど閲覧されることはなかった。

かつてニホンカワウソが広く分布していた長崎県の五島列島では、ニホンカワウソの情報提供者はかなり高齢であり、過去の分布を知るには早急な調査の実施が必要とされる（上田・安田 2016）。高知県においても、最後の生存確認から 40 年近く経っている。実際に新莊川周辺でニホンカワウソを目撃したことがある人は 75 歳代以上の世代であり（徳島県立富岡東高等学校・佐藤大紀、私信）、現存するニホンカワウソに関する資料も今後確実に保管され続けるとは限らない。本研究では、須崎市教育委員会に保管されていた資料を電子化して保存するとともに、資料の情報を整理して、1979 年に新莊川周辺で目撃されたニホンカワウソ個体の特徴や行動範囲を記録することを目的とした。

材 料 と 方 法

1. ニホンカワウソの資料整理

須崎市教育委員会に保管されていたニホンカワウソの資料は、教育委員会の許可を受けて内容を閲覧した。資料は新聞の切り抜きや手書きのメモ、定期的な巡視記録等、ほとんど紙媒体に記録されたものであった。加えて、多数の写真が含まれるアルバムが存在した。本研究では、紙媒体の資料を全てスキャナー（ScanSnap SV600, Fujitsu, 神奈川県川崎市）で電子化し JPEG 画像として保存し直し、電子化資料一式は教育委員会に提出するとともに、複製した一式を手元に保存した。資料は、須崎市と中土佐町、津野町を含む新莊川周辺の情報と、その他の地域の情報に振り分けた。情報は、信頼度の高い方から A と B の 2 段階に順位付けし、B はさらに内容によって a と b の 2 つに分けた。すなわち、信頼度の分類は次の通りとなる。信頼度 A：ニホンカワウソ個体の目視による確認に併せて、その写真や映像、標本のいずれかが存在する場合。ただし、写真や映像、標本のいずれも存在しないが、1 名のカワウソ研究者によって確認されている場合も信頼度 A とした。信頼度 B-a：ニホンカワウソ個体が目視によって確認されたが、写真や映像、標本のいずれも存在せず、研究者ではない一般住民による目撃情報であった場合。信頼度 B-b：ニホンカワウソ個体の目視による確認はなく、糞や足跡など痕跡のみが存在した場合。以下の解析では、特に言及のない場合、全ての信頼度（A, B-a, B-b）をデータとして用いた。

2. 地理情報システムによる解析

最後の生存確認となった 1979 年において、電子化し

た資料からニホンカワウソ個体の新莊川水系における目撃または痕跡のあった場所と日付に関する情報を抽出し、オープンソースの地理情報システムソフトである Quantum GIS（QGIS, version 2.14.3-Essen ; URL : <http://www.qgis.org>; 2016 年 8 月 7 日確認）を用いて解析した。場所に関しては、(i) 堰や橋などの具体的な構造物や目印となる名称が記載されている情報、(ii) 集落名（市町村名の下位に属する地域名）と河川名の情報、(iii) 集落名のみ情報、(iv) 市町村名と河川名の情報、(v) 市町村名のみ情報、(vi) 河川名のみ情報、(vii) 湾名のみ情報（漁師が船上から遊泳する個体を目撃）が存在した。(i) については、具体的な構造物や目印となる名称がある地点とした。(ii) については、河川が該当集落を横切る区間の流程の中間地点（道路や海岸についても同様）とした。(iii) については、新莊川の本流が該当集落を横切る区間の流程の中間地点とした。(iv) については、河川が該当市町村を横切る区間の流程の中間地点とした。(v) から (vii) については、該当する地点を特定するための情報としての正確性が著しく低いことから、本研究では位置情報を必要とする解析対象から除外した。

新莊川は津野町船戸の山間部を源流点（北緯 33°25'27", 東経 133°06'01", 標高 356 m）として須崎湾へと流れ込む河川である。源流点から津野町大川にある諏訪神社周辺を流れる支流との合流点（北緯 33°26'06", 東経 133°08'25", 標高 131 m）までを上流域、諏訪神社の合流点から支流である依包川との合流点（北緯 33°23'50", 東経 133°13'52", 標高 14 m）までを中流域、依包川との合流点から河口（北緯 33°23'02", 東経 133°16'47", 標高 0 m）までを下流域と定義した。上流域は川幅 10 m 未満（流量 1 m³/s 未満）、中流域は川幅 10–40 m（流量 1–10 m³/s）、下流域は川幅 40 m 以上（流量 10 m³/s 以上）の規模に相当する（佐藤・加藤 2013）。

3. 目撃情報の整理

ニホンカワウソの生存に関する情報は、個体情報と痕跡情報に分類し、さらに個体情報は生体、死体の 2 項目に分け、痕跡情報は足跡、食べ残し跡、糞、泊まり場の 4 項目に分けた。

結 果

須崎市教育委員会に保管されていたニホンカワウソに関する資料は 456 点存在し、そのうち日付を伴った生存に関する資料の数は 127 点、その他はニホンカワウソの紹介記事や調査した結果見つけられなかった冊子などの

表 1. 須崎市教育委員会に保管されていたニホンカワウソに関する資料の種類ごとの集計と、そのうち日付を伴った生存の情報がある資料の数

資料の種類	単位	資料数	情報あり
新聞記事	枚	122	57
冊子	冊	68	8
調査報告	冊	2	2
記録紙	枚	38	38
メモ	枚	210	21
ノート	冊	1	1
アルバム	冊	3	0
その他	個	12	0
合計		456	127

表 2. アルバムに収められていた写真の種類ごとの集計（重複を除く）と、そのうち新聞記事などに既に引用された写真の数

種類	写真数	引用済
採餌	31	6
陸上	38	4
水中	12	2
捕獲 * ¹	7	2
痕跡	21	2
標本	5	0
その他 * ²	18	0
合計	132	16

*¹ 死亡個体の写真を含む。

*² 風景の写真及び、ニホンカワウソが写っていない写真。

生存に関する情報を含まない資料であった（表 1）。アルバム 3 冊には合計 166 枚の写真が収められており、いずれの写真にも日付が記されていないかった。166 枚のうち、重複する写真や元の写真を引き伸ばしたものを除くと 132 枚であり、これらの写真を陸上歩行している姿や水中遊泳している姿など種類ごとに分類した（表 2）。132 枚のうち、新聞記事や須崎市が発行するニホンカワウソに関する刊行物などに引用されていた写真は 16 枚あった。これまでに引用された 16 枚の写真を除く 116 枚には、ニホンカワウソの表情がわかる貴重な写真も含まれていた（図 1）。

日付を伴った生存に関する 127 点の資料に含まれる総情報件数は 549 件で、その中には複数個体の生存に関する情報が記載されているものもあった。549 件の情報のうち、場所と日付が重複する情報があったため、重複する同一情報を除くとニホンカワウソの生存情報件数は 409 件であった。そのうち、新荘川周辺での情報件数は 1963 年から 2009 年にかけて 276 件、その他の地域では 1949 年から 1999 年にかけて 130 件であった（3 件は地点情報なし）。ニホンカワウソの生存に関する情報のう

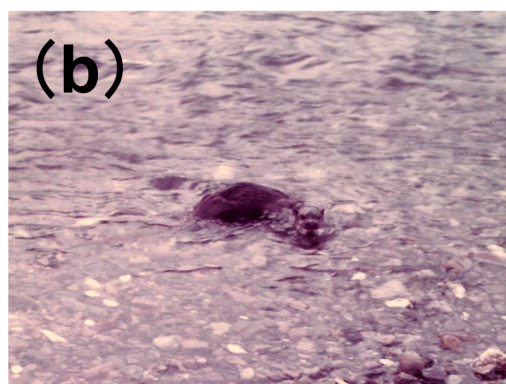


図 1. 須崎市教育委員会に保管されていた資料のうち、これまで未公表の写真。写真は須崎市教育委員会に所蔵。(a) 陸上、(b) 水中の写真。撮影された日付と場所は不明。

表 3. ニホンカワウソの生存に関する情報における項目ごとの集計

情報の種類	項目	新荘川周辺	その他の地域
個体	生体	174	34
	死体	5	42
痕跡	足跡	48	34
	食べ残し	41	7
	糞	29	18
	泊まり場	5	3

1 件の情報が複数の項目を満たす場合もある。

ち、新荘川周辺で最も多かったのは生存個体（生体）の目撃情報で 174 件、次いで痕跡情報の足跡が 48 件であった（表 3）。その他の地域では、死体に関する情報が最も多かった。

全 456 点の資料中に、写真などの証拠が存在するニホンカワウソにおいて性別が記載されていた情報は 3 件のみであった（表 4）。そのうち 2 件は、1974 年 7 月末に新荘川に現れた個体はメスという情報であった。残りの 1 件は、1975 年 9 月 5 日の深夜に須崎市押岡大阪セメント高知工場の食堂に現れた個体はオスという情報であっ

表 4. 証拠が存在するニホンカワウソにおいて性別が判断できる情報

日付	場所	性別	内容
1974 年 7 月 25 日	須崎市上分集落	メス	逆さ吊りにされて捕獲される
1974 年 7 月 29 日	須崎市高保木集落	メス	アユ漁中の父子に捕獲されたのち放獣, アユ 10 尾を餌として与える
1975 年 9 月 5 日	須崎市押岡地区	オス	深夜に大阪セメント高知工場の食堂に侵入したのち放獣

た. これ以降, 1978 年までの間には, 新莊川周辺におけるニホンカワウソの生存に関する情報はなかった.

1979 年の新莊川周辺におけるニホンカワウソの情報件数は, 3 月から 10 月にかけて 111 件存在した (8 月と 9 月に新莊川大淵と呼ばれる地点に各 1 件の情報があつたが, 現在における詳細な地点は不明). 3 月から 6 月は主に中流域である上分集落から河口にかけて 34 件の情報が存在し, 支流の依包川でも 1 件存在した (図 2a). 7 月から 8 月はさらに上流の津野町姫野々集落から河口にかけて 51 件の情報が存在し, 依包川でも 13 件の情報があつた (図 2b). 9 月から 10 月は上分集落から下郷堰までの間で 8 件の情報があつた, 依包川と津野町永野集落でも各 1 件の情報が存在していた (図 2c). 目撃情報の多くは「遊泳している姿を見た」などの遠距離もしくは距離が特定できない場所からの短時間の目撃であつたが, 6 月から 8 月にかけては「人が泳いでいる場に現れた」など近距離で比較的長時間の目撃が 10 件報告された (表 5).

信頼度 A と B-a のデータに限定して解析した結果, 1979 年の新莊川周辺で個体識別しうる身体的特徴が示されていた情報は 13 件存在した (図 3). これら 13 件のうち, 最も上流側の地点は新莊川首頭首工, 最も下流側は馬越集落で, これらの地点間は直線距離で 4.6 km 離れていた. 身体的特徴の内訳は, 首にヒモが巻きついていた個体の情報が 4 件 (以下, ヒモ個体: 8 月 1 日, 3 日, 6 日, 9 日), 首に傷跡があつた個体の情報が 5 件 (傷跡個体: 3 月 29 日, 4 月 22 日, 6 月 3 日, 7 月 20 日, 8 月 24 日), 首に傷跡が見えなかった個体の情報が 2 件 (傷なし個体: 6 月 27 日, 7 月 13 日) であつた (図 4). 加えて, 異なる 2 名による 11 日間の観察の中で (5 月 17 日～27 日, 6 月 4 日～14 日), 日によって首に傷跡が確認できた日とできなかった日があつたという情報がそれぞれ 1 件ずつあつた (傷跡有無個体). ヒモ個体のヒモは 8 月 9 日に捕獲された際に回収されて須崎市教育委員会にて保管された (2016 年 12 月 20 日に須崎市教育委員会に問い合わせたところ, 現在のひもの所在地は不明となつていた). 回収された際, 首のひもは稲を束ねるために用いられるナイロン製のヒモであることが確認された.

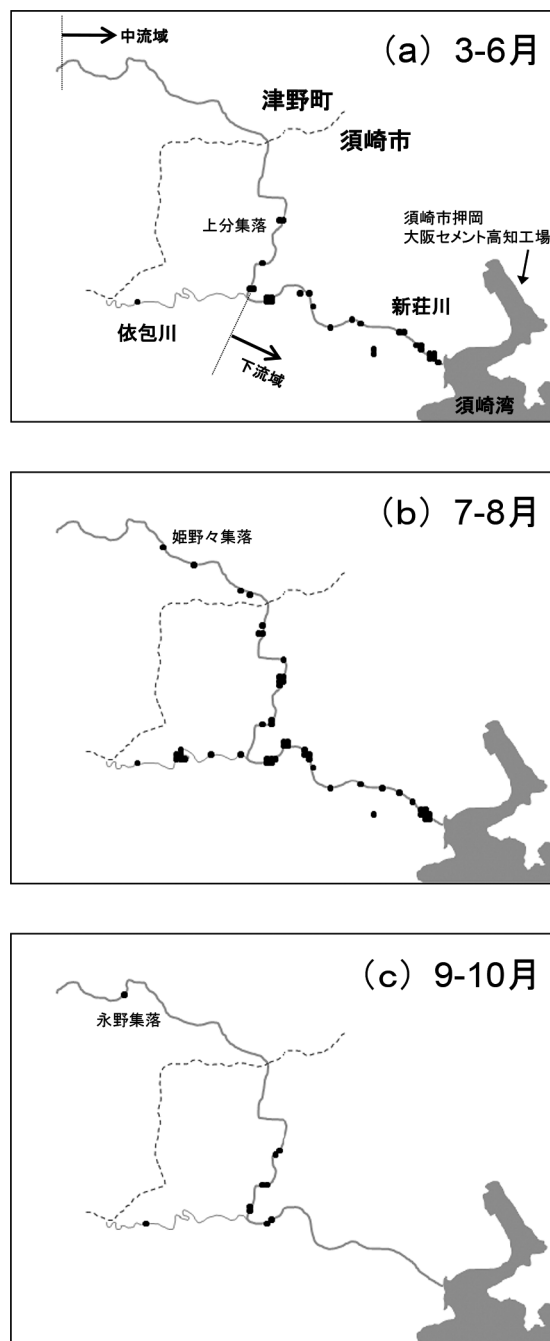


図 2. 1979 年の新莊川周辺におけるニホンカワウソ情報の変遷 (信頼度 A, B-a, B-b のデータを基にした). ●は情報が存在した地点を示す. (a) 3 月から 6 月 ($n=35$), (b) 7 月から 8 月 ($n=64$), (c) 9 月から 10 月 ($n=10$) におけるニホンカワウソ情報.

表 5. 1979 年の新荘川周辺におけるニホンカワウソの生存に関する情報に含まれる人馴れに関する記載が示されている情報

日付	場所	内容
6 月 3 日	須崎市高保木集落	坂ノ川川で人前に現れて悠々と泳ぐ
7 月 20 日	須崎市上分集落	大学生が捕獲して胴に縄をつけて歩く、通りかかった郵便局員が注意して放獣
7 月 20 日	津野町姫野々集落	子どもが泳いでいるところに現れて追い回される
8 月 * ¹	須崎市須崎集落	新荘川に設定された水泳場に現れて悠々と泳ぐ
8 月 5 日	須崎市須崎集落	水泳中の女の子にニホンカワウソの方から接近
8 月 7 日	須崎市大洲 * ²	中山と明神ヤスヒコが水泳中に遭遇
8 月 9 日	須崎市上分集落	上分橋下で首周辺に巻きついたひもを外す
8 月 16 日	須崎市下郷集落	中氏堰でアユ釣りが投げ捨てたウグイを拾って食べる
8 月 17 日	須崎市須崎集落	変電所前で投網を打っているすぐ近くを泳ぐ
8 月 18 日	須崎市須崎集落	アユ 3 尾を餌として与える

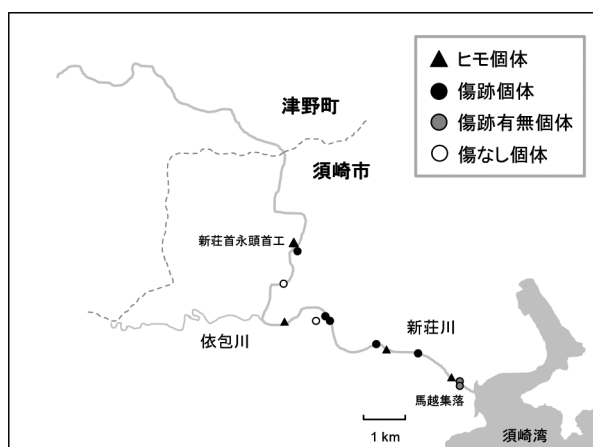
*¹ 資料中に日付の記載がなかった情報。*² 資料中に新荘川と記載はあったが、詳細な地点は得られなかった情報。

図 3. 1979 年の新荘川周辺における個体識別でき得る身体的特徴が示されていたニホンカワウソ情報。信頼度 A と B-a のデータのみを示す。▲：ヒモ個体，●：傷跡個体，●：傷跡有無個体，○：傷なし個体が確認された地点。

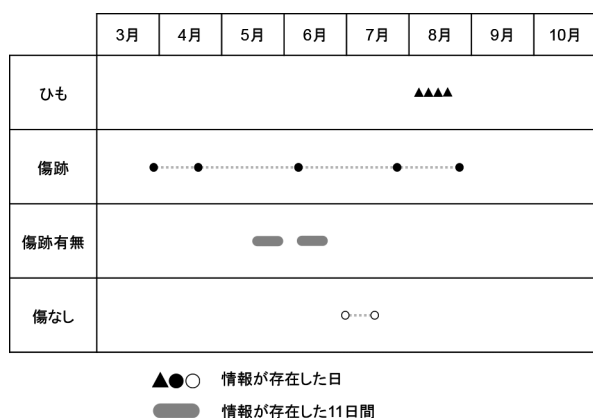


図 4. 1979 年の新荘川周辺における各身体的特徴をもつ個体同士の時期的な関係性。信頼度 A と B-a のデータのみを示す。▲：ヒモ個体，●：傷跡個体，■：傷跡有無個体，○：傷なし個体が確認された日付または期間。

1979 年以降の情報件数に関しては、新荘川周辺においては 1979 年が最も多く、その後徐々に減少し、1990 年から 1994 年にかけてわずかに増加した（図 5a）。その他の地域においては、1983 年は 12 件、1991 年が最も多く 15 件で、その他の年は 10 件未満であった（図 5b）。いずれの地域においても、1980 年以降には信頼度 A の情報はなかった。

考 察

ニホンカワウソが日本で最後に生存確認された 1979 年において、生存に関する情報が季節的に変化したこと、特に夏季に情報件数が増加して広範囲に広がっていたことがあきらかとなった。ニホンカワウソの餌としては、多種の魚類やモクズガニ (*Eriocheir japonica*) などの甲殻類が知られている（宮本 2015）。魚類のうちアユ (*Plecoglossus altivelis altivelis*) は遊泳力が強く、ニホンカワウソは上手に捕まえることはできなかったと考えられている（宮本 2015）。一般に流量が多い下流域ほど魚種が多様となる（井上 2013）。一方、甲殻類は新荘川では上流域から下流域に広く分布している（佐藤・加藤 2013）。1970 年代は、夏季に新荘川の下流域に子どもたちの水泳場が設置されており（高知新聞企業 1997）、下流域では川周辺で過ごす人間の数と時間が増加したであろう。ニホンカワウソは人間で混み合う河川を避けて中流域や依包川にまで行動範囲を広げていたのかもしれない。ニホンカワウソの主な繁殖期は 10 月から 11 月であるため（宮本 2015）、夏季における広範囲での目撃は繁殖行動によるものではないと推察される。

1979 年におけるニホンカワウソの身体的特徴に関して、8 月にヒモ個体が目撃される以前に、傷跡個体が 4

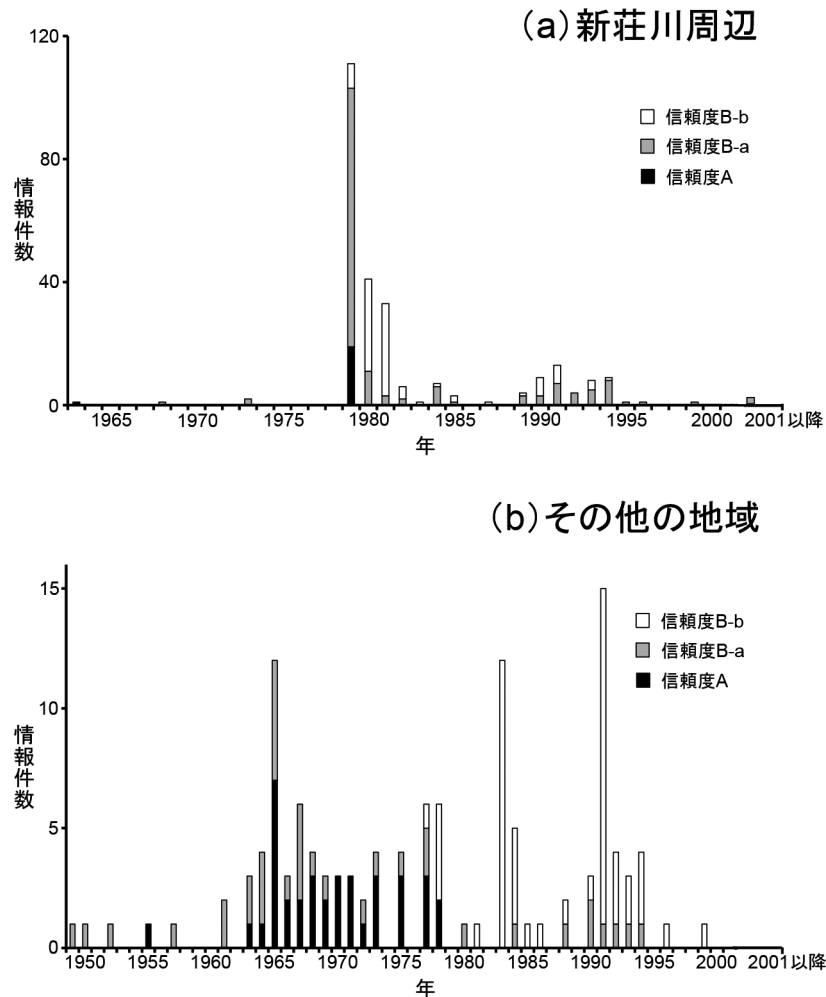


図5. 1979年以降のニホンカワウソの生存に関する情報件数の変遷. 信頼度A, B-a, B-bのデータのみを示す. (a) 新莊川周辺, (b) その他の地域における情報件数.

回目撃されていたことから、7月以前の傷跡個体はヒモによる傷跡ではないと推測される。傷跡個体は3月29日から8月24日にかけて5回目撃されていたが、その期間中に、傷なし個体が2回、傷跡有無個体が2回目撃されていた。首に傷跡がある個体とない個体が同時期に目撃されていたことから、1979年の新莊川周辺にはニホンカワウソが複数個体存在していた可能性がある。

ニホンカワウソと同種で北半球に広く生息するユーラシアカワウソ (*Lutra lutra*) は警戒心が強いいため、飼育個体であっても人間に慣れるまで3ヶ月程を要し、既に慣れた個体であっても捕獲することは困難である (高知県立のいち動物公園・森本さやか 私信)。ユーラシアカワウソは食欲旺盛なため、野生個体であっても日常的に餌を与えている人間に慣れることは不可能ではないが、遊泳中の子どもに接近するといった人間に対して全く警戒心をもたない個体になるには、幼獣期から人間と

深く関わった生活を送っている必要がある (森本さやか私信)。ユーラシアカワウソと同様に、ニホンカワウソについても警戒心が強い動物であると考えられているため (高知新聞企業 1997)、ニホンカワウソが近距離で長時間目撃されることは通常ありえない。新莊川周辺では1976年から1978年までの3年間はニホンカワウソの生存に関する情報は得られておらず、1979年における3月の最初の日撃から近距離での目撃がされ始めた6月までの3ヶ月間という短期間で人間に対する警戒心を解く可能性は低い。これらのことから、1979年の新莊川には人間に対して警戒心をもつ個体と人間に慣れた個体がいたと推察される。前述の身体的な特徴に加えて、人慣れといった側面からも、1979年にはニホンカワウソが複数個体存在していた可能性が示唆される。

ニホンカワウソのなわばりは10 km程度とされているため (高知新聞企業 1997)、身体的特徴を伴った13件

の情報があつた地点は1個体のニホンカワウソの行動圏に含まれる。新莊川では少なくとも1974年から1975年には複数個体が生存していた可能性が高い。目撃情報の通り、これらの個体がオスとメスであつたのであれば繁殖していたことも考えられる。したがって、1974年から1975年にいた複数個体やその子孫が1979年時点でも複数存在していた可能性は十分ある。

ニホンカワウソが日本で最後に生存確認された1979年以降にも本種の生存に関する情報が得られた。1983年にその他の地域で12件の情報があつたが、同年に高知県仁淀村別枝でハクビシンの幼獣の腐乱死体が発見され、その当時はニホンカワウソと報道されていた(1996年の再鑑定でハクビシンであると判定)。1990年から1991年にかけて3回にわたって高知県西南部においてニホンカワウソ生息状況調査が行なわれた。1992年には黒潮町佐賀の海岸で採集された動物の糞に含まれていた1本の刺し毛が、走査型顕微鏡による鑑定でニホンカワウソのものであつたという結果が報道された(町田1998)。1980年以降の情報件数の多寡は比較的規模の大きな調査の有無や報道などによる住民の関心の高まりに左右される傾向があつた。強度の人慣れをしていた個体は1980年以降も新莊川付近にいれば目撃されていたはずであるが、そのような情報は残っていなかった。したがって、人慣れ個体は1980年までに死亡したか、新莊川から離れたと考えられる。また、1980年以降には個体識別ができる情報は1件も含まれておらず情報の信頼度が低いため、1980年以降に新莊川においてニホンカワウソの個体が存続していたかどうかは分からなかった。

本研究で参照した資料には日付と場所が記載されていた目撃情報であっても、個体に関する身体的特徴や具体的な行動など、詳細な記録がない情報が多数を占めていた。そのため、1979年の新莊川周辺に複数個体のニホンカワウソがいたという考えは推測の域を出ない。日本における野生動物の絶滅ないしは勢力衰退の歴史のうち、正確な記録として残されている例はほとんどない(宮下1989)。野生動物は絶滅してしまえば、残された記録以外にはその動物に関する新たな知見を得ることができない。そのため、絶滅が危惧される野生動物に対しては、

その生態や詳しい目撃情報を記録として残しておくことが重要となる。

謝 辞

本研究を実施するにあたり、ニホンカワウソに関する資料と写真を貸していただいた須崎市教育委員会、カワウソの生態に関してご助言いただいた高知県立のいち動物公園カワウソ飼育担当の森本さやか氏、徳島県立富岡東高等学校講師の佐藤大紀氏、筑紫女学園大学現代社会学部の佐々木 浩博士、森林総合研究所九州支所森林動物研究グループの安田雅俊博士に深く感謝申し上げます。査読者の方々からは本原稿に対して有益な助言をいただきました。

引 用 文 献

- 安藤元一. 2008. ニホンカワウソ—絶滅に学ぶ保全生物学. 東京大学出版会, 東京, 233 pp.
- 浜野龍夫・中田和義. 2011. モクズガニの整体と保全. エビ・カニ・ザリガニ—淡水甲殻類の保全と生物学 (川井唯史・中田和義, 編), pp. 169–172. 生物研究社, 東京.
- 井上幹生. 2013. 魚類. 河川生態学 (川那部浩哉・水野信彦・中村太士, 編), pp. 123–144. 講談社, 東京.
- 小林 哲. 2000. 河川環境におけるカニ類の分布様式と生態—生態系における役割と現状—. 応用生態工学 3: 113–130.
- 高知新聞企業. 1997. ニホンカワウソやーい! 高知新聞社, 高知, 287 pp.
- 町田吉彦. 1998. ニホンカワウソの過去と現状. くろしお 13: 28–34.
- 宮本春樹. 2015. ニホンカワウソの記録. 創風車出版, 松山, 212 pp.
- 宮下和喜. 1989. 絶滅の生態学. 思索社, 東京, 291 pp.
- 佐藤大紀・加藤元海. 2013. 高知県新莊川においてニホンカワウソの存続に影響を与えた要因. 黒潮圏科学 6: 218–228.
- 佐藤大紀・比嘉基紀・加藤元海. 2017. 四国におけるニホンカワウソの生息状況の変遷および海岸線と人口との関連. 黒潮圏科学 10: 128–135.
- 辻 康雄. 1974. 南国のニッポンカワウソ. 誠文堂新光社, 東京, 220 pp.
- 上田浩一・安田雅俊. 2016. 五島列島におけるカワウソの分布と絶滅. 哺乳類科学 56: 151–157.

ABSTRACT

Profiling the last known individual of the Japanese river otter in 1979 in the Shinjo River, Kochi PrefectureKotoko Yoshikawa¹, Syuji Yachimori² and Motomi Genkai-Kato^{1,3,*}¹ Department of Biology, Faculty of Science, Kochi University, 2-5-1 Akebono-cho, Kochi 780-8520, Japan² Shikoku Institute of Natural History, 470-1 Shimobun-otsu, Susaki, Kochi 785-0023, Japan³ Graduate School of Kuroshio Science, Kochi University, 2-5-1 Akebono-cho, Kochi 780-8520, Japan

*E-mail: genkai@kochi-u.ac.jp

The Japanese river otter (*Lutra lutra nippon*) is an extinct species. In 1979, the last witnessed sighting of this species was recorded in the Shinjo River, Susaki, Kochi Prefecture. Little is known about the behavior of the last individual found in 1979, because of the scarcity of spatiotemporal information on its existence around the river. We identified the date and location of the information and rearranged the information spatiotemporally. Analysis of the information revealed that the last individual found in 1979 showed two discriminating characteristics in terms of its appearance and behavior. The individual had a remarkable scar on its neck at one time and no scar at other times. In addition, the individual was habituated to humans at one time, and did not display such behavior at other times. There were reliable reports that a female individual inhabited the Shinjo River in 1974, and a male one inhabited the river in 1975. The lifespan of the Japanese river otter is presumed to be ten to fifteen years. These results imply that more than one individual could possibly have inhabited the Shinjo River in 1979.

Key words: extinct species, Kochi Prefecture, population, river otter, Shinjo River

受付日 : 2017 年 7 月 22 日, 受理日 : 2017 年 9 月 30 日

著者 : 吉川琴子, 〒780-8520 高知県高知市曙町 2-5-1 高知大学理学部生物科学コース理論生物学研究室

谷地森秀二, 〒785-0023 高知県須崎市下分乙 470-1 四国自然史科学研究センター

加藤元海, 〒780-8520 高知県高知市曙町 2-5-1 高知大学大学院黒潮圏科学部門 ✉ genkai@kochi-u.ac.jp